年間第十九主日

ヨハネ６・41‐51

2021.8.8

カトリック高円寺教会９：30 ミサ

岡本大二郎神父（サレジオ会）

わたしは数年前、しばらくローマに留学というか、勉強の機会を与えられて、上智で一通り勉強を終えて行きましたので、何か勉強して来いと言うことで、２年ちょっとくらい過ごしました。その間、サレジオ会がやっているサレジオ大学というところ、日本人の神父は一人だけだったんですけれども、韓国人の神父がサレジオ会に何人かいまして、仲良くなりました。日本に来たことがあった人もいて、韓国人の神父とヴェネツィアに行ったりしました。その人に言われたことがあります。「俺とお前は違う。自分は生きるために食べている。だけど君は違うね。君は食べるために生きているね」と言われました。結構でもこれなかなか面白いですよね。食べるために生きるのか、生きるために食べるのか。今日の朗読とすごく結びついていると思います。人間は食べなければ生きられません。食べるために生きるか、生きるために生きるか。

今日、わたくし、シスターのところでミサをしてきました。サレジアン・シスターのところですね。その後こちらに来たんですけれども、朝食を出してもらいました。そこは量がいつも多いんですよ。大量の朝食という感じで、そこのミサに行ったときは昼食がいらないくらい食べてきて、今もお腹いっぱいなんですけれど、ただ、食べる物すべて元を質すと命なんですよね。この命しか食べられないというところですね。パンを食べました。もともとは小麦です。

そうした物の繋がりの中にわたしたちは生きていて、この「食べる」ということに関して、農業ですね。麦、これも誰かが見つけたんですよね。「これいいぞ」と。ちょっとものの本によれば、まあこれ仮説ですよ、農業が成り立つためには、同じ時期に蒔いて、同じ時期に育っていって、同じ時期に実を付けて、そして実る。そして、実ったものをガサガサっと採るわけですよね。でも、それは突然変異でもないとたぶんできないんじゃないか、とわたしが読んだ本に書いてありました。大体の植物は種に触ろうとするとパッとはじけるとか、そんな植物もたくさんある。でも、あるとき、小麦とか、お米もそうですね、日本人にとって大事な、あるいはアジアにとってと言ってもいいかもしれません、やっぱりそれを見つけたんですよね。そして、わたしたちにとって、一緒に芽

吹いて、育ち易い、育て易く実りをもたらし易いものをどんどん探していった。その技術があって、わたしたちはこの街ってそれがないとできないんですよね。もちろん農業だって不作でバタバタ人が死ぬこともある。でもその前と比べると、食べる営みから人々が解放されていって、この街というものが生まれてくるわけですよね。そして、色々な文化。

聖書もそういったものの上でないと考えられません。聖書、文字に書かれています。文字が書かれるのに必要なもの、そうした食べ物にずうっと生きることに、生存に繋いでいくことに余裕が出て来たときに出てこられるものだというところはあると思うのです。そうした繋がりの上にこの聖書も成り立っている。この、わたしたちが食べるという営みが関わりがあるんです。わたしたちは命を食べる。そこを聖書はちゃんと見ているということですね。わたしたちは命しか食べられない。

わたしがイタリアに居たのはちょうど３年前だったんです。その頃、わたしはイタリアに行って一年ぐらいでしたか。説教しないといけなかったんです。そのときにちょうど福音がこの箇所だったんです。

司祭のアルバイトと言ったら言い方が悪いですけど、イタリアに留学するとちょっと回ってくるんですね、「夏の間ちょっと手伝ってくれない？」って言って。わたしは巡礼地の週末に少しだけですけど手伝ったことがあります。ベネディクトという聖人、西方の修道生活の源というのかな、起源になる人です。その人が修行したところから更に山の中、１０キロ、１５キロくらいでしょうか、車で山道を１、２時間行ったところにヴァッレピエトラという三位一体の聖地があって、もともとの起源は分かりませんけれども、日本で言うと山岳信仰みたいなところです。すごく夏は涼しいんです。すごく高い、何百メートルもある石の山があります。ヴァッレピエトラ、ピエトロ、岩という意味ですね。石、ペトロのことです。ヴァッレ、谷ですね。「石の谷」って、まさにそういう感じのところです。そこで、今日の福音のところでわたしは説教をしないといけなくて、外国語で説教するってなかなか大変です、読むことも含めて。その中で何を言おうかなと、色々考えていました。

すると、石が目に迫ってくるんですね。高い、何百メートルもの石の壁のところに、くり抜いて教会というか小さい祠みたいな聖堂があって、そこに野外の聖堂があって、そこでミサを捧げたんですが、この石を見てちょっと思い出したことがあったんです。この石を食べられたらいいな、と。人生の苦労がないな、と思ったんですけれど、でもそれって、皆さん思い出しましたね、イエス様の最初の悪魔の誘惑は何ですか？「神の子ならこの石をパンに変えたら」。

それでわたしたちの「食べないと命が続かない」、そこのところが解決される

ようにも見えます。生きるために食べるのか、食べるために生きるのか。でも、食べないと命は繋がらないんですよ。そこのところ、悪魔の誘惑とも関わっています。確かに、石がパンになったら、人類の大きな問題が解決されるかもしれません。でも、イエスは今日おっしゃっているんですね。もしかしたら、今日のところをその時に、「あ、これはその誘惑への答えかな。石をパンに変えるのではなくて、自分がパンになる。その道行をイエスはとられた。自分が食べられる者になる。そこに永遠の命、救いがある。その答えとも言えるんじゃないかな」と。

似たような趣旨のことを、今日の「聖書と典礼」の中で長崎教区の中村司教様が書かれています。やはり、わたしは食べられるものになった、と。そして、わたしたち、パンを頂くわたしたちは、また、パンになっていく、その道行の中に、永遠の命、救いの喜びがそこにある、と。

今日これから、このミサの中でわたしたちはパンをイエスの体として頂きます。それが人々の救いになっていく。わたしたちのまず命がそこで支えられて、そして、このわたしたちの命がパンになって世に救いをもたらすものとなる。そして、救いがこの世に満ちていく。そのことをイエスは始められました。

この救いのわざ、今日もこの高円寺教会を一つの場として続けています。そして、皆さん家に帰って、それぞれの場でそのパンとなって人々に食べ物を与えるものとなっていく、命を与えるものになっていく。そこに永遠の救いがある。この道行ですね。今日も心を新たにしながら、主の体をいただいて、主の命をいただいて、喜びを持って人々に証ししていきたいと思います。